



葬儀屋さんの制服

「制服を着たフィールドワーカー」というと、どのような姿を想像するだろうか。制服を着て、つねに身なりを整え、いつでもでも請われるままに駆けつけ、しかも相手は生きている人間とは限らない。そんな一風変わったフィールドワーカーに明け暮れてきたわたしの研究対象は、葬儀屋さん。その世界を、制服という切り口から少しだけ覗いてみよう。

田中 大介 早稲田大学人間科学学術院助手



「さいたまセレモニー」の式場スタッフの制服。しっかりと背筋を伸ばし、それでいて威圧感や横柄な印象を与えず、あくまで顧客を丁寧に「受け容れる」姿勢を穏やかに醸しだしている点に注目してほしい

葬儀屋さんに「なった」

「タナカ、いまから新宿に行つていい。なに、プレゼントだよ。うちの会社と契約している紳士服店があるから、そこで『ぼく、新人です』って伝えるんだ。そう、制服をつくるのさ。タナカの、な。それを着たら、これからはガクシヤじゃなくなるな」

そんなことばから、フィールドワークがはじまった。「ガクシヤじゃなくて、まだ大学院生なんです」というわたしのたどたどしい返事も含めて、いまでも思い出すことができる。ことばの主は、わたしが約一年間にわたって弟子入りすることになった葬儀社の、葬祭事業本部・葬祭部長。つまりは現場のトップだ。

そして数日後に事務所に届いたのは、控えめだが瀟洒な感じのスーツが数着。ちょうど少し前に同じタナカという苗字の社員が退職したばかり

なあ」と思うことしきりだった。ほとんど夜討ち朝駆けに近い日々には憔悴しきつて、身なりを整えるどころではなかったのだ。「ぼろは着ても心は錦」ということばがあるが、その逆に「錦は着ても心はぼろぼろ」の状態である。だからこそ葬儀屋さんの熟練度は、ある程度まで、その身なりでわかってしまう。膨大で複雑な仕事を的確にこなし、かつ「人間の死」を前にして礼節を保つことができるだけの能力、知識、人間性が、そこにあらわれるからだ。

寄せ書きで埋め尽くされた白衣

この原稿を書いている最中に、とある葬儀屋さんを訪れてみた。少し驚いた顔で、しかしにつこりと笑ってわたしを出迎えてくれたのは、埼玉県本庄市を中心に営業している「サンメンバーズ・さいたまセレモニー」の小林一敏副社長と、野川高德本部長。二人とも葬儀の現場を知り尽く



死者の制服ともいえる死装束。浄衣(じょうえ)、もしくは明衣(みょうえ)ともいう。多くの場合、このように一揃いのセットになっている



小林副社長と野川本部長



葬儀社でフィールドワーク中の筆者

だったので、その人の残していったネームプレートをスーツの胸ポケットにつけたとき、わたしは葬儀屋さんに「なった」。

死を前にして礼節を保つ

もちろん、そのときには遺体の納棺も、霊柩車の運転も、祭壇の設営も、悲しみに打ちひしがれる遺族の前で感情を制御することも、何ひとつできるわけではなかったから、それは単に「なった、ような気がした」だけなのかもしれない。それでも、はじめて自分の制服に袖とおしたときは、確実に自分の何かが変わっていくような感覚をおぼえたのはたしかだ。制服のちから、とでもいえるだろうか。

とはいえ、フィールドワークをはじめた当初は自分でも「似合っていない大ベテランである。そのような方々でも気を抜いて、身なりどころではない瞬間もあろうと意地悪く不意打ちで訪問してみたが、その思惑は外れてしまった(写真左中)。だらしない腕まくりをして、姿勢もどこなく疲弊(ひへい)しきっているわたしの過去の写真(左下)と見比べると、恥じ入るばかりだ。

そんなわたしもフィールドワークが進むうちに、一応は制服のスーツが徐々に似合うようになったのだが、永遠にその場に居続けるわけにもいかない。最後の日、わたしが弟子入りした葬儀社の人びとが開いてくれた慰労会で、「ガクシヤはこれが制服だろ?」ということばとともに手渡してくれたのは——びつしりと寄せ書きで埋め尽くされた白衣。「いや、社会人類学者が白衣を着ることはあんまりないですが……」とは、やはり言えなかった。制服ではじまったフィールドワークが、制服で終わるとすれば、それはそれで首尾一貫しているのだから。